

幼兒童話に於ける道德觀

東京高等保育學校 内山 憲 尙

一 童話の胎生と道德

1 メルヘンとその解き方

未開人が自然や自然現象、生死、運命や動植物について疑問や恐怖を持つた時、之を説明し、解決するのに今日の如き科学によつて、之をなすこと能わずして、彼等の未開の頭で之を解釈し、説明せんとしたのである。この説明の形式が、物語りの形式となつて現われた、これを「説話」(或は小話と訳す)と云う。

このメルヘンは、生れた時には、その時代の人たちは、これを信じ、真となし、これに対して絶対の信頼を捧げて来たのである。

しかるに、次第に文化が進んで、科学が発達してくるに及んで、これまで真実と信じていたメルヘンはその非現実性、非科学性、不合理性が発見されて、次第に大人の信仰を失つて、「昔の人の作り話」となつてしまつた。大人の信仰を失つたメルヘンは、その心的発達の低い児童の心に一致し、迎えられることとなり、今まで大人のための「話」が児童のためのものとなり、メルヘンはそのまゝ子供のための「童話」となつたのである。

メルヘンに対する解き方については、大体次の様なものをあげる事が出来る。

1、説話を歴史とする解き方——民族的経験としての考え方で、これは未開人の歴史と云うことが出来る。

2、説話を創作とする解き方——自然現象を主とした考え方で、未開人の文学と云うことが出来る。

3、説話を宗教とする解き方——生死運命に対しての考え方で、未開人の宗教と云うことが出来る。

4、説話の人類学的解き方——民族生活の反映で未開人の哲学と云うことが出来る。

5、説話を譬喩とする解き方——倫理的標準、理想境へ到達する手段との考えで未開人の道德であると云うことが出来る。

2 説話の道德的解き方の基礎

説話を譬喩をもつて作り上げた、未開当時の道德的な表現の基礎として、すべてのものに靈魂と生命を感じる考え方、即ち動物でも植物でもすべて成長するものには人間と同様の生活をしているものであり、人間と同様靈魂を持つていと云う、アニミズムの考え方をあげることが出来る。

更にこの説話は単なる例え話ではなく、彼等が信仰を保つていたところ(第二の基礎)がある。ドナルド、マツケンジーは「説話は信仰の産物であり、信仰は経験の産物である」と云つてゐる。

3 民族説話としての譬喩談

譬喩談として一番古いものはジャータカである。ジャータカは紀元前三世紀頃に出来たと云われている。釈迦の前世物語の形式をとつてゐる。五百数十の話が収められて居り、慈悲、正直、正義、寛大、犠牲、智慮等の教訓を持つてゐる。

次にパンチャタントラがある。パンチャタントラは紀元前二百年頃に出来たものと云われている。南方印度のマヒラローピヤの王アマラサクテイに三人の王子があつたが、三人ともあまり物覚えのよい子供ではなかつたので、波羅門僧ザイシニユサルマンにその教育を依頼した。彼は五篇からなる譬喩談を作つて王子たちに与えた、これがパンチャタントラである。

有名なイソップは紀元前六百年頃に出来たものと云われている。イソップはギリシヤのサモス島に生れた奴隷である。五百数十の譬喩談は全世界に伝えられている。

二 童話に於ける道徳観

1 詩的正義

詩的正義 (Poetical Justice) は、芸術的正義観とも訳されてゐる。この詩的正義は幼児童話に於ける完全な道徳であると云ふことが出来る。児童は童話の中に出て来る、善良なものはずから、悪いものは必ず罰せられ又は亡びると云う正義観をもつ。

幼児は話を聞いているうちに話中の人物に同情し、又は話中の人物になり切つて、話の進展に対して興味を持つ。この期待的興味は正義に立脚して、正直なもの、勤勉な者、慈悲深いもの、親切なもの、正しい者の成功を信じ、反対に邪悪なもの、不正なもの、無慈悲なものは必ず成敗されると云う筋書きを描いて聞いている。そ

して、自分の考えている筋書通りに、善人は榮え、悪人が罰せられた時によるこびと満足を感じるのである。

故に幼児童話に於ては大団円を以て、めでたしめでたしで終結しなければならぬのである。

大人の小説は現実生活の描写であるから、そこにはめでたしめでたしで終らないものもあり、或はずるいことをして成功する場合もあり、又は善良なる美人が薄命であることもあるのであるが、幼児の童話は理想であるから、現実の醜悪は少しも加えられないのである。

この意味に於て童話全体が完全なる道徳であると云ふことが出来る。

2 時代と道徳

童話はその胎成された時の道徳が、そのまま、現われていることが多い。日本神話には日本古代の道徳が現れて居り、徳川時代には徳川時代の道徳が現われている。例えば、「さるとかに」にしても、赤本の「さるかに合戦」(西村重長)にしても、滝沢馬琴の「燕石棟志」にしても、黒沢翁滴の「童話長篇」にしても、親鸞が猿に殺されて子鸞がその仇を討つ形式になつてゐるのである。即ち、徳川時代に於ては仇討と云うものは一種の美德とされ、正しい仇討ちは賞讃されたのである。

「かちかち山」も仇討ちを主なテーマとした童話である。

畸形児に対する昔の両親の考え方の冷遇的態度は、日本でも外国でもあつたものと見えて童話の中にも現われている。

古事記の「少彦名命」も海に捨てられ、「一寸法師」も御伽草子では老夫婦が大きくならぬのを苦にして、よそへ遣らうと相談するのを見て、自身から申出て暇を乞ふことになつてゐる。外国では

マリムの拇指太郎も森にすてられる形をとつてゐる。

継子をいじめる話も、東西を通じて存在するところであつて、日本の松山鏡、椎の実拾い、外国のシンデレラ、白雪姫、ヘンゼルとグレーテルなども森へ捨てられる話である。

当時はこんなことをあまり非道徳とは考えなかつたのであろう。

これが民族童話として今日まで伝わつてゐるのである。

道徳は時代と共に移るものである。昔道徳的と考えられたことが今日では道徳的でないことがある。故に民族童話に於てはこの点の当然現代道徳に反しない様に改作しなければならぬのである。この点の改作は許さる可きである。

3 民族性と道徳

童話には、民族の伝統や習慣が織り込まれている。ある民族に於て、道徳と考えられていることがらも、他の民族に於ては正しいこととして許容されないことがあり、ある民族に於ては当然のことと思われていることが、他の民族に於ては非道徳と考えられることがある。

アンデルゼンの「火打箱」では、一人の兵隊がお姫様をつれ出して、その王様を外へ投り出して、自分が王様になる話であるが、これなどはそのまゝ、日本の子供に話すわけには行かない。

又、「月の見た話」の第十四話の中に、鶴が赤ん坊をつれて来ると云つて、女の子がこれ待っている話があるが、鶴が赤ん坊をつれて来ると云うのは北欧の民族の言い伝えであつて、日本の子供には、そのことを説明しないとわからないことになる。

三 幼児の道徳

1 幼児と道徳

幼児は主として本能的な生活を営み、自己中心的であるから、非社会性である。道徳は本来社会的なものであつて、そこには社会的な約束があり、秩序が存在するのである。しかし幼児は、社会から拘束されることなく、自分の思うままに生活をするから、自然道徳的な行いとはなり得ないのである。

即ち幼児は先天的に無道徳で、行為に対して責任もなければ意志の自由もない。そして経験や訓練が与えられるまでこの無道徳状態にあるのである。

たゞ彼等にも善と悪との区別を、おぼろげ乍ら意識して来る。これは幼児の道徳的傾向とでも云うことが出来る。

2 善悪の観念

幼児の善悪の観念も、幼児自身の自覚から生れるものではなく、善行為に対して、成人がこれを是認し、賞めることによつて快を覚える、そこで快と善とが一つになつて、それを善行為と考え、悪行為に対しては成人の否定があり、叱られ、いやな顔をされることによつて不快を覚える、そしてこれを悪と結びつけて考える様になるのである。

童話に於て善人が賞せられ、悪人が罰せられることは、幼児の善悪の観念と結びついて正義観を持たせることとなるのである。

3 幼児童話と道徳

童話の中に詩的正義が盛り込まれているならば、それがそのまゝ、幼児の道徳教育となるものである。例えば慈悲深い爺さんが宝物の入つたつづらを貰い、無慈悲なお婆さんが、蛇や蛙の入つたつづらを貰うことは幼児にとつては当然の痛快事である。

四才になる女の子が、風呂に入り乍ら「お婆さん、悪い」としきりに、憤慨している。最初何のことかわからなかつたが、それはお

屋に聞いた舌切雀のお婆さんの無慈悲をにくんでの憤慨であつた。
正義観を持つてゐる話を話した後へ、「それでですから皆さんも……」と話者が教訓をつける人があるが、これは無駄なことであり、不必要なことである。

幼児の生活と童話教育について

隆崇幼稚園 寺 田 豊 子

童話は幼児の心理と生活に適した、最良の道徳教育である。各幼稚園、保育所、家庭に於て美しく正しい童話がより多く与えられ、幼児の萌芽の上にやわらかな夢と人生に對する正しい見方、考え方が培われることを切望するものである。

具体的に云えば幼稚園教育に童話をどういふ風にとり入れるか、ということなのであるが、幼稚園教育は義務教育ではなく極く一部の幼児について云うことであり、実際にはひろく一般的にすべての幼児に必要なことなので右のような題にした。

先ず、今までの古い童話という觀念から抜け出たいとおもう。アンデルセン童話、グリム童話とか、桃太郎、カチく山とか、出来上つた作品のみを童話ときめてしまわず、もつとひろく自由に童話というものを考へてみる必要がある。

一般的に童話は、殊に幼児童話は作品価値も内容的にも低く扱われて来たようである。何故かと云えば、言葉をやさしくしなければならぬ。内容をかんたんにしなければならぬ等で、作品にするのにむずかしい。それに幼児は人生経験に乏しく、道徳的にもあまりあからさまな表現が出来ないので、むずかしい。また話すのにも今までは特に幼児には必要以上にていねいな言葉で、必要以上に内容を美しくし、みにくいもの、きたないもの、暗いものにはふたを

して、幼児の聴覚外にしたようだ。果してそれでよかつたらうか。幼児童話は甘やかされてきた。成人と共に現在の世相に身をおいてゐる幼児にとつて、幼児だけが特殊扱いでいい筈がない。年令的な低さはあつても、内容まで低下させることは出来ない。

日々、保育に尊念される先生方が、折にふれて子ども達とかわす会話に、友達同志で語り合う言葉に、精二ぱいの表現でおかあさまに幼稚園の話などきかせている子ども達の言葉に、よし語る言葉は少々粗野でも乱暴でも、それ自身が美しい童話だと感じられる時が必ずあるとおもう。これこそまさに幼児童話であり、童話教育の出発である。

幼児の生活体験は言語に始まり言語に終るといつてよいであらう。その場面として

- 1、家庭で母との話し合い（最も多い。幼稚園では先生との話し合い）
- 2、家庭でその他の家族との話し合い